

花と植物癒し協会  
日本アロマ香水マイスター協会



2022年 スペシャルレッスン

# Maria Callas

歌に生き、愛に生きた伝説のディーバ  
マリア・カラス 光と影

講師用テキスト



監修：代表 青木 恵  
作成：藤本真紀

## 歌に生き 愛に生きた伝説のディーバ マリア・カラス

その美貌と圧倒的な歌唱力、表現力で聴衆を虜にし、20 世紀最高のソプラノ歌手と呼ばれたディーバ、マリア・カラス。1947 年イタリアでデビューを飾ってから、1965 年ロンドンのコヴェントガーデン王立歌劇場の舞台までの 17 年間はマリア・カラスの全盛期でした。

情熱的で正直な性格の彼女の一挙手一投足は常にマスコミの称賛と非難を浴びました。その中で成功への階段を昇り詰め、オペラを万人に愛される芸術として世界に広めました。

しかし、その栄光の輝きとは裏腹にたいへんな苦悩がありました。ディーバとして成功しながらも、真実の愛を得ることはなく、ディーバであるための代償として己の身を削り、命を縮め死を迎えた孤独な女性としての姿がありました。その人生はまさにオペラそのものの悲劇的なものだったのです。



### 母の英才教育と恩師との出会い

1923 年 8 月に、ギリシャからニューヨークに移民として上陸した夫婦、ジョージとエヴァンゲリア。妻、エヴァンゲリアは妊娠中でした。

1923 年 12 月 4 日、街路に雪が積もる日、ニューヨークの病院で産声をあげたのがマリア・セシリア・カラスでした。

夫婦の間には、長女と嫡子の長男がいましたが、その息子をチフスで亡くしていました。エヴァンゲリアは、代わりになる息子を望んでいたため、生まれた娘を 4 日間見ようとすらしなかったのです。

母親の愛情は長女のジャッキーに集中し、幼いころのマリアは顧みられることはありませんでした。ただ、野心的だった母は、娘たちを芸能の道で成功させることを夢見て、姉にはピアノを、マリアには声楽を学ばせました。マリアが 7 歳のときに彼女の音楽的才能に気づいた母親は、マリアを歌手として成功させる＝金儲けさせるために何もかもを犠牲にするつもりで情熱を注ぎ始めました。

娘二人をどうしても音楽家にしたかった母は、合意の上で夫と離婚しギリシャへ帰ることにしました。ギリシャで、姉はピアノ、マリアは歌に専念しました。

13 歳のマリア・カラスは、ギリシャの主たるオペラ歌手の出身校である名門、アテネ音楽学校に年齢を詐称して入学し（16 歳でないと入学不可だった）本式のレッスンが始まったのです。

そこで、マリア・カラスに決定的な影響を及ぼすことになる教師、エルビラ・デ・イルダコに出会うことになります。

イルダコは、スペインの大歌手であり、有名な教師でもありました。戦争のためにたまたまギリシャに滞在しており、戦争が終わるまで仕方なくアテネ音楽学校の教師を務めることにしたのです。イルダコが、若いマリアの歌を聞いたことが、運命的な出会いとなりました。「まだ統制の採れていない音の滝のようでした。私は目を閉じて、この荒削りの金属を完璧な形に鑄造していく作業が、どんなに楽しいだろうと想像したのです。」とイルダコは述懐しています。この時二人に深い絆が生まれました。

マリア・カラスは、母親から得られなかった愛情を教師の中に見出しました。マリア・カラスにとってイルダコは単なる教師をはるかに超える存在となりました。イルダコがいたからこそ、マリアはがむしゃらに勉強に励み、夜を徹して楽譜をむさぼり読みました。だからこそ作曲家たちやオペラ中の人物たちを再発見し、それに打ち込むことができたのです。イルダコは、最初から、粗削りなままのマリアの声に感嘆していて、まだ海のものとも山のものとも定まらないマリアの声を、それが極めて常軌を逸した、類まれな黄金であることを分かっていたのです。

マリア・カラスの声をはっきりと見極め、正しい方向づけをし、彼女に備わっていた熱意を育てました。

\*このころは、ナチスとイタリアがギリシャに進行しアテネが占領下となっていた時代。マリアは家事を任せられ、食料を必死でかき集める毎日を送っていました。しかし、次第にそれも難しくなり若い女性たちが食料を得るため占領軍の兵士たちと交際することが増え始め、マリアもそのひとりになりました。

この時期の話をするのをマリアは嫌いました。恩師イルダコは、この件について「あの時期彼女が泣いているのをよく見ました……私が救ってやらねばと思いました。」と語っています。誰もがはっきりとは語っていませんが、母がそれをマリアにやらせたのでは、とされています。

姉は家を去り、マリア・カラスは毎日母のために食料と生活費を持ち帰る生活をしていました。昼には支給された食事を母のために持ち帰るため家と職場を再び往復していました。十代のマリア・カラスはひとりで母を養っていたのです。

その後も母への援助はずっと続きました。母はたびたび金の無心に来ました。マリアはずっと経済的援助をしていましたが、稼げば稼ぐほどより多くを要求してきました。それを断ると母はマスコミに「娘が金を送ってくれない」と不満を語ります。するとマスコミは記事にし、世間は「なぜ母親を支えないのか」とマリアを責める…そんな日々が続きました。



それでも彼女は生涯母や姉、父を切り捨てることができず、支え続けたのです。

そうして、1938年にアテネ王立歌劇場で「カヴァレリア・ルスティカーナ」のサントウツァを歌いプロデビューをしました。

イルダコの教えによって、それまで見向きもされなかったレパートリーのオペラを、マリア・カラスは完全に自分のものにしていました。ほかの歌手の及びもつかない切り札を手に世界の檜舞台に繰り出していきました。やがて母の手を離れ世界最高のプリマドンナになる決心をしたのです。

1945年、マリア・カラスはさらなるキャリアアップのため、イルダコの反対を押し切り、父のいるニューヨークに渡りました。ニューヨークは国際的な活躍の場にふさわしいに違いないと思ったからです。

しかし、アテネではスターに近い存在だった彼女は、ニューヨークでは全くの無名で前途に何の見通しもない日々を送りました。

24歳になろうとしていたマリア・カラスは、いつも一人で寂しい思いをしていました。

### コンプレックス

彼女の孤独の原因の一つは、外観にありました。かなり肥っていたのです。身長175cmで体重が100kgありました。マリア・カラスが子供のころから、母は娘の声に栄養を与えるためと、ケーキ、砂糖菓子などなんでも与えました。卵の黄身に砂糖を入れてかき混ぜて飲ませることをしていました。マリア・カラスは肥り、顔には吹き出物がたくさんできました。ホルモン障害（代謝障害）を引き起こし肥ったと本人の手記には書かれています。

イルダコもマリア・カラスとの出会いの時の様子をこう語っています。「ある朝、声を聴いてほしいとやってきた女の子がマリア・カラスでした。一目見てよい印象は受けませんでした。背が高く肥っていて、顔はニキビだらけでちょっと見苦しくて、服装は質素というか、ほとんど気にかけていない様子で…でも彼女が声を発したとたん、その並外れた歌の力に体が硬直しました。…」と。



マリア・カラスは、体型にコンプレックスを抱いていて、肥った姿を人に見られるのを極端に嫌い、痩せるためにありとあらゆることを試みていました。

## メネギーニとの出会い、結婚

約2年のアメリカ生活ののちマリア・カラスは、ヨーロッパに渡りました。

1947年の夜、野外の円形劇場ヴェローナで、マリア・カラスはヴェネチアの街の歌姫ジョコンダの美しい衣装をまとうて、聴衆の前に現れました。ヴェローナは、イタリア・オペラのすべてといわれます。音楽と歌と夜とが渾然一体となり、華やかな演奏に2万5千の聴衆は歓呼する…ヴェローナで歌うためには強靱な肺とのどと体格を持っていなければなりませんでした。



しかし、マリア・カラスは、たちまち生涯を通じて不動のものとなる彼女の役を作り上げました。愛のために死ぬ歌手ジョコンダを見事に演じたのです。

その直後、ヴェローナの実業家ジョヴィンニ・バッティスタ・メネギーニと出会います。この出会いが、彼女の人生を変え、歌手活動の決定的転換点にもなりました。

マリアより23歳も年上のイタリア人のメネギーニは、中背でずんぐりとしていて、容姿は普通の男でした。職業は実業家で金持ち。一度も妻を持つとはせず、金ですべてが手に入ると考えていました。彼は、初対面でマリア・カラスを気に入りました。肉体的、性的魅力を感じたのです。そしていつもそうしていたように、愛と引き換えの援助の契約を結ぶことを提案しました。金には糸目を付けなかった彼は、衣装を買い替えてくれたり、豪華なホテルを用意してくれたり歌手として売り出すためにも手を貸し、何くれとなく面倒を見てくれました。マリアにとって安心できる生活を与えてくれた彼に初めて「愛のようなもの」を感じ、マリアは50も過ぎた彼に愛の手紙を何通も送り、結婚したいと望みましたが、メネギーニは他の女性と同じく結婚するつもりなどさらさらありませんでした。ところが1949年フェニーチェ劇場での公演で、マリアは「ワルキューレ」のブリュンヒルデを務め、そのわずか3日後、全く異なる「清教徒」のエルヴィーラ役を成功させ、またすぐ「ワルキューレ」に戻るといふ離れ業をやったのけ、世界を驚かせました。さらにロッシェニ・オペラ等、超絶技巧を要求される多くの演目をことごとく完璧に仕上げました。

この女は金になると、マリアの稼ぐ金を直感したメネギーニは、52歳にして29歳のマリア・カラスと結婚することを決めたのです。

メネギーニは、父親のような保護を彼女に与え、それと同時に彼女の歌手生活のすべてを手中に握ることになり、マリアも彼にすべてをゆだねる決心をしました。これからマリアはただ歌い続けていればよく、そのほかのことはすべて彼が引き受けました。メネギーニは、

マリアの独占エージェントとなり、その状態は8年間続くことになります。

マリアは時に「わがまま」と評されました。それは、メネギーニが出演料を吊り上げるため、彼女の知らないところで興行主に「妻がそう言っていますので」と駆け引きを繰り返したことが大きな要因でもありました。メネギーニは商売のためならマリアの評判が落ちようと関係なかったのです。そのためマリアは、多くの劇場と関係が悪くなり、世間から貪欲でケチなひどい女と思われるようになってしまいました。それでも彼女は夫を信じ、夫を愛していました。そして二人は、10年以上おしどり夫婦を続けました。

## スカラ座の女王へ

\*ヴェローナに着いて間もなく、マリア・カラスはもう一人の人物と出会っていました。彼もまた、それ以降の彼女の人生で決定的な役割を果たすことになります。

それは、マエストロ\*のセラフィン。野外劇場でマリアの声を聴いたとき、その声のすばらしさにすぐに気づき、その声と気質を鍛え上げ、全世界の劇場のライトを浴びせてやりたいと考えました。

マリアは、その庇護と指導によって伝説的な歌姫へと成長しました。イルダコの後を受けて、マリア・カラスの歌手人生に大きな影響を及ぼした指導者です。セラフィンという人は、わずか32歳でスカラ座の音楽監督となり、46歳からの10年間はニューヨークのメトロポリタン歌劇場音楽監督、56歳からは再びイタリアに戻ってローマ歌劇場の音楽監督となった人です。

(\*マエストロ：音楽家、芸術家に対する敬称)



1952年1月、ミラノ・スカラ座で最初に演じたのはソプラノにとって最も難易度が高いといわれるベッリーニの「ノルマ」でした。完璧な彼女の歌声に聴衆は熱狂しました。スカラ座の女王となったマリア・カラスは世界の名だたる歌劇場に次々と出演し、熱狂の渦を巻き起こします。マリア・カラスの舞台を見ることは、ひとつの社会的ステータスにまでなったのです。

1953年頃に1年半ほどの期間に40kgのダイエットに成功。技量・容姿ともに比類なきディーバとなり、ただ歌うだけのオペラ歌手から、見られることを意識した舞台女優としてのカラスを作り上げます。

1953～1958年頃までマリア・カラスは、ミラノ・スカラ座の女王として君臨します。その頃の音源は、貴重な歴史遺産として、今日でもオペラ・バイブルとしての価値は変わら

ず再販され続けています。

## ギリシャの海運王アリストテレス・オナシスとの出会いと別れ

マリアよりも 17 歳年上のアリストテレス・オナシスは、タバコ商から造船帝国を築き上げたギリシャ人実業家。世界最大の個人所有の海運艦隊を集め、世界で最も裕福で最も有名な男性の 1 人でした。学歴はないものの、6ヶ国語をあやつり教養も高かった彼は、カリスマ性のあるいわゆるプレイボーイでした。



マリア・カラスが 37 歳の時、オナシスが所有する豪華客船の旅に招待されます。体調不良やスキャンダルで疲れ果てていたマリアはこれに応じました。長期間の船旅で二人の関係は親密になりました。間もなくそれはマスコミの知るところとなり、当代きってのプリマドンナと一代で成り上がった世界一の大富豪との恋、双方に夫、妻子があったことから、マスメディアの格好のネタとなり世間の注目を集めました。マリアは、夫を捨てた不埒な女として非難を受けました。しかし、オナシスを心から愛したマリアは、大きな代償を払ってメネギーニと離婚し、オナシスも妻と離婚しました。

\*マリアは、手記の中でメネギーニとは幸せではなかったと明らかにしています。メネギーニは金のことを考え、マリアを絶え間なく叱りつけ、外界から隔離していたといいます。

「…私はあまりに長いこと籠の中の鳥のような気でした。そのためにあまりの活力と魅力にあふれているオナシスやその友人たちに出会ったとき別の女になったような気がしました。私はずっと年上のメネギーニと生活していたため、年齢以上に活気を失い老けていたのです。彼と同じように太りお金と地位しか考えませんでした。今、私はやっと普通の幸せな女です」

\*マリアは、幼いころからの持病、低血圧や副鼻腔炎、過度のダイエットやスキャンダルによるストレス、難役をこなすために喉を酷使し続けたための声の不調とも戦い続けてきました。

マリアは、彼との結婚が本当に愛だと夢見ていたのです。

マリア・カラスは 9 年間オナシスと一緒にいました。オナシスは力があり、マリア・カラスの金には興味がありませんでした。メネギーニがその貪欲によって引き起こしたもめ事は消え、マリアは、スカラ座などの歌劇場とも和解し、祖国ギリシャでも成功者として受け入れられ歌うことができました。何とんでも成功したいという切迫概念のような思いも消え、余裕をもって歌うことができ、批評家の酷評も気にしなくなっていました。

しかし、結婚を望んだマリアに対し、オナシスは首を縦に振りませんでした。オナシスもある意味メネギーニと同じでした。世界でも有名な女性マリア・カラスを傍らに連れていけば、商売のプラスになる、これまでもオナシスはそういうことをしてきた、彼にとって“よくあるやり方”だったのです。

マリア・カラスは、オナシスがアメリカで新しい彼女とデートしているという報道を耳にします。相手は、暗殺されたアメリカ元大統領、ジョン・F・ケネディの元妻ジャックリーヌ・ケネディでした。マリアは、オナシスを信じ報道を否定しましたが、その願いもむなしくオナシスとジャックリーヌは結婚します。

マリア・カラスは、心に大きな傷を負い睡眠薬によって自殺を図るも未遂に終わりました。「オナシスなしでは、私はつまらない人間です。私が女になるのは彼の目の中でだけ」オナシスと出会うまで耐えたものより一層苛酷な苦悩と侮辱が与えられたのです。

\*オナシスはジャックリーヌとの結婚後、数年でマリアと復縁します。(そもそもジャックリーヌが子どもたちを暗殺から身を守るための盾として選んだ手段がこの結婚だった)オナシスは、まっすぐな愛情を与えてくれたマリアの元に戻るしかありませんでした。体調も崩したオナシスは亡くなるまでの数年間、マリアの愛を受けながら過ごしました。

## 最期の舞台

その後マリア・カラスは、若い才能を育てるために「ジュリアード音楽院 マスタークラス」を開催し、後進の指導に情熱を傾けます。その頃、20年前にオペラで何度か共演していたテノール歌手ジュゼッペ・ディ・ステファノと再会します。当時は、ことあるごとに張り合う仲でした。失意の中にいたマリアを励ます気持ちもあり、二人でもう一度ひと花咲かせようと大きなツアーを提案しました。そうして、1973年、マリア・カラス最後のワールドツアーが行われ、各国で賞賛されました。マリア・カラスの生涯最後のステージは、日本の札幌でした。



ツアーの間、パートナーだったステファノとマリアは、深い仲になっていましたが、彼には妻がいてそれは成就させてはいけない恋でした。50歳のマリアにとってこれが最後の恋でした。

ツアーを終えステファノとも別れたマリアは、パリの自宅に籠り、ほとんど人と会うこと



はありませんでした。プードルを2匹飼い、2人の家政婦と穏やかに暮らしていました。

1977年の今日、9月16日、マリアは自宅で倒れ53歳でこの世を去りました。その最期は、椿姫のヴィオレッタの最期のようなものでした。死因は心臓発作とされていますが、遺族の承諾もなしに早急に火葬されたため、毒殺説、自死説など謎も多いといわれます。彼女の亡骸は一旦パリで埋葬されましたが、生前のマリアの希望により祖国ギリシャのエーゲ海に散骨されました。

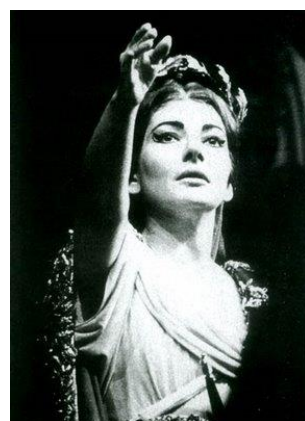
マリアは生涯にわたって母や姉から金を無心されていました。家族が起こす問題に疲弊しながらも、マリアは生涯支え続けました。

マリアの遺書には母と姉に遺産から経済支援を続けること、使用人にも十分な金額を与えること、若い音楽家たちのための「カラス奨学金」など支援基金を立ち上げること、ミラノの国立がん研究センターへ寄付することなどが書かれていたそうです。

マリア・カラスの生涯は、まさにオペラのように劇的なものでした。

彼女の歌手人生の裏には常人には到底及ばない情熱とたゆまぬ努力がありました。あらゆる精進を惜しまず、人々がオペラのプリマドンナ、ディーバに抱く憧れと尊敬の対象であろうと常に努めていました。彼女の代表作の一つ「トスカ」の最も有名なアリア「歌に生き、愛に生き」はそのまま、マリア・カラスという歌手のテーマ曲であり、レクイエムでもあるといわれます。

「私は歌（芸）に生き、愛に生きて、いままで人に悪いことをしたことはありません！知り合った惨めな人には、手を差し伸べ、助けてきました。いつも真摯に信仰し、私の祈りは聖なる祭壇に昇り、いつも真摯に信仰して、祭壇にお花を供えてきました。苦しんでいるときにどうして、どうして、神さま、私にこんな報いをするのですか。私は聖母のマントに宝石を捧げ、星と天に歌を捧げてきて、そうすると星と天はあっそう美しく微笑みました。苦しんでいるときにどうして、どうして、神さま、私にこんな報いをするのですか」



## マリア・カラスの代表作

### ●椿姫（ジュゼッペ・ヴェルディ作）



ヴェルディは、19世紀を代表するイタリアの作曲家であり、主にオペラを制作しました。

イタリア・オペラに変革をもたらし、現代に至る最も重要な人物と評されます。

パリ社交界の花形ヴィオレッタと田舎から出てきた青年紳士アルフレードとの恋。苦難を乗り越えようやく真実の愛が成就するときヴィオレッタはすでに肺病に冒されており喜びながら息を引き取りました。

### ●ノルマ（ベッリーニ作）

シチリア島のカタリーニアに生まれたベッリーニは、34年の短い生涯に10作のオペラの中でも、「ノルマ」の人気は群を抜いています。

紀元前50年ころ、ローマ占領下のガリア地方を舞台に巫女長ノルマとローマ総督ポリオーネの禁断の愛、若い巫女アダルジーザとの三角関係を軸に物語は展開していきます。

（「ノルマ」は女性歌手にとって最も負担のかかる演目ともされており、このような難しい作品にマリア・カラスは、新たな命を吹き込んでいった）

### ●ルチア（ドニゼッティ）



北イタリア・ベルガモ出身のドニゼッティ作の悲劇。イタリアで19世紀前半に流行した「狂乱オペラ」の代表作。17世紀スコットランドが舞台。ルチアは兄エンリーコの宿敵エドガルドを愛していました。兄は傾いた家運を再興するための政略結婚を強行、ルチアは深い悲しみの

余り新郎アルトゥーロを刺し殺して正気を失い息絶え、衝撃を受けたエドガルドも自らの剣で後を追ったのです。

### ●トスカ（プッチーニ）

プッチーニ、イタリア・オペラ最大級の人気を誇る作曲家。

薄幸なオペラ歌手のトスカ、恋人で反体制画家のカヴァラドッシ、ローマを暗黒支配する

警視総監のスカルピアの愛憎が渦巻き、激情の限りを表現します。主要登場人物が 3 人とも非業の死を遂げるといふ、凄惨な内容でありながら、古今において人気作です。マリア・カラスの当たり役とされています。

参考、引用文献：真実のマリア・カラス レンツォ・アッレーグリ

マリア・カラス ひとりの女の生涯 ピエール・ジャン・レミ

マリア・カラス 聖なる怪物 ステリオス・ガラトプロース

画像：Wikimedia Commons 他